

炊き出しに故郷の風情

底冷えという言葉の意味をかみしめた。

昨年12月30日未明、あまりの寒さで目が覚めた。毛布を3枚敷き、さらに毛布2枚にくるまっていた。毛糸の帽子をかぶり、靴下を2枚重ねほさしても横たわる体に冷気が襲ってくる。

ここは横浜・寿地区。簡易宿泊所が密集する、いわゆる「日本三大寄せ場」。ビルの谷間にある小さな寿公園では年末年始にテント村が出現する。ホームレスをはじめ、この街で暮らす日雇いの労働者、単身高齢住民らの年越しを支える「寿越冬闘争」の拠点だ。この冬で44回を迎えた。

神奈川大をはじめ多くの学生が毎年参加し、私も3年前からテントで寝泊まりしている。運動会テントをベニヤ板で囲み、ブルーシートで覆った簡素なもの。すきま風がスケジュール表を揺らす。

テント泊初日の29日夜から30日未明は最低気温4度。石油ストーブに灯油が入っていない。凍てつく路上や公園で、わずか1、2枚の毛布や寝袋にくるまって夜を明かすホームレスたちは、この寒さが身にこたえているに違いない。

午前4時ちょうど。寝返りを打つと、入り口で見知らぬ60代の男性が手招きしていた。

「4時だ。炊き出しまだか？」。私は跳び起きて「先輩、どうしました？ まだ夜ですよ。テントの奥で寝ている大学生を起さぬように小声

ルポ 寿越冬'17~'18(上)

で言った。

炊き出しは午後4時から。午後と午前を勘違いしたのか。スケジュール表を指さすと、実は知っていた。簡易宿泊所で暮らしており飢えているのではないという。若者がちにぎやかに過ごす寿公園での年の瀬。「ふるさと」の正月のような手作り感があふれる寒風を味わえるのが待ち遠しいのだと理解した。

越冬闘争は寄せ場の大阪・釜ヶ崎や東京・山谷のほか新宿、渋谷などで行われる。メインイベントはやはり炊き出しだ。列に並び直せば配食に余裕がある限りお代わり自由なのが、この寿流。1人で5、6杯も平らげた先輩は数知れず。

年末年始の炊き出しは30日のみ味の雑炊に始まる。31日は年越しそば。1月1日は餅つき、2日はしょうゆ味の雑炊、最終3日はカレーライスとなっている。餅とカレーの配食は千食分を超える人数ぶりだ。

「初めて炊き出しに参加した時は、食事に困っている人たちに提供するだけだと思っていた」

準備に奔走していた桜美林大3年の佐藤証さん(21)は当初、軽い気持ちで加わった。越冬の炊き出しで使う食材の多くは支援団体からのものだ。野菜は川崎市内の農場が協力し、牛肉は全横浜屠場労組が提供した。牛豚を解体する仕事に従事

している同労組関係者は「自分たちが差別を受けていると感じるように、日雇いの労働者や野宿者も見えぬふりをされるだけでも傷ついているのでは」と思いを寄せる。25日の集会で「当事者と交流ができれば、自分のなかで何かが少しずつ変わっていく。当事者の人たちの力になれば、なおうれしい」と意気込みを口にした。

炊き出しを通してよりよい社会にしたいという支援者やボランティアたちの思いに触れた佐藤さん。「寒い中、列に並んで『ありがとう』と言ってくれる。その思いが多く、支援者に伝わるよう、感謝の気持ちを込めて参加するようになった」と語った。

◆

炊き出しの材料をカットする「切り込み」と呼ばれる作業は午前9時から始まる。例年40、50人ほどのボランティアが集まるが、集合時間までに公園にテーブルやまな板を並べ、包丁や食材を準備する人手が足りない。立正大1年の安藤里紗さん(19)は30日夜からテントに泊まり、31日の早朝に準備に加わりと買ってきた。ホームレスに関心があつた参加したものの夜の寒さに凍え、未明にコンビニでカイロを買った。「ドアが開いたら、コンビニがとも暖かくて居心地が良い場所だったと気付いた」

明け方には、みぞれが降ってきた。調理用の手袋をして野菜を洗う水が冷たい。年越しそばに入れる昆布やシタケ、ニンジンなどの野菜は小さく形を整えて切ることを心掛けるよう炊き出し班から指示があった。「高齢者に食べやすくするため」と聞いて安藤さんは包丁を持つ手に力を込めた。

炊き出し班は代々、この街で暮らす人たちが担う。長年親方として活躍した須藤義美さん(57)は昨年度を期したため親方を辞し、本部に詰めていた。

◆

寿地区で家族と暮らし、横浜港で港湾荷役の現場で働いた。ミナトで働く仲間同士で支え合おうという気概で加わった炊き出し。港湾労働者は少し濃いの味付けを好み、須藤さんは「寿の味」を守ってきた。この冬、年越しそばは、高齢者の口に合うように塩分控えめに変わった。

◆

元日の早朝。ビルの谷間で日が当たらない寿公園のテントでは明治学院大2年の藤崎巧さん(20)がぐっすり眠っていた。初参加ながら連日泊

◆寿越冬闘争 1974年、オイルショック後の不況で横浜港の仕事が失った日雇いの労働者の年越しを支援するために始まった。実行委員会は春日雇労働者組合、寿医療班、寿支援者交流会、日本キリスト教団寿地区センターなど7団体で構成している。

まり込み、大みそかは夜更けまで野宿経験がある「タカダさん」と貧困問題を語り合った。

屋すきから2組の白と片で90分のもち米をつき始め。雑煮、からみ餅、きなこ餅の計1825食を配った。

ポテト・ビルの趣味の看護師尻枝政和さん(45)はひたすら杵を振り下ろした。「大勢でつくった餅を味わう。まさに正月だね」と上腕筋をさすりながら感激した様子。

返し手を担ったカメランシアシスターン香澤由希さん(28)は「モチモチ感とコシがあつて、とてもおいしい」と満面の笑みだ。

配食待ちの行列が伸びていく。「俺にもつかせろ」。餅をつく若者の姿に血が騒いだのか、先輩が次々と飛び入りした。みんなで10を数えて声援を送った。

◆ 寿公園ではことぶき共同診療所の越智祥太医師や看護師らが待機し、司法書士ら専門家が相談会を開く。行政機関が閉庁期間に保護を求めるホームレスを支援する拠点でもある。

そのためテントは夜も明かりを灯し続ける。寿越冬闘争実行委員会の高沢幸男事務局長(47)は言う。「一番しんどい年末年始に凍てつく路上で過ごす仲間とともに年を越す。仲間を孤立させず、困ったお互いに支え合う。このことが当たり前になる世の中になりたい」 (二木 崇)



つくった餅を手にする香澤さん(中央)。炊き出し班やボランティアが雑煮など1825食を配った
11日午後1時20分ごろ、寿公園